
ウルフ族の紋章～出逢い～

糸香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルフ族の紋章と出逢い

【Nコード】

N8588Y

【作者名】

糸香

【あらすじ】

昔から生き続けている妖怪。ウルフ族のミラルドが主人公。

ミラルドは戦闘の中で、愛する妻を亡くしてしまう。

それをきっかけに人を愛する事を辞めてしまった。

愛情からしか妖力を得る事が出来ないウルフ族にとってそれは、死を意味する事だった。

ミラルドの父エルドから授けられたペンダント（紋章）に蓄えられた妖力によって、子供の姿で生き長らえて来た。

あれから五百年の時を経て、一人の女性と出逢う。

ミラルドを仇と付け狙う者。守ろうとする者。慕う者。
彼女の愛を手に入れる事が出来るのか。
妖力を手にし、大人の姿に戻るのか。
ミラルドの運命はいかに。
時代を超えたラブストーリー！。

戦闘（前書き）

是非とも読んで下さい！

戦闘

人間が支配するよりも 遙か昔から 数多の妖怪が住み続けている。その中に 誇り高きウルフ族は いた。

彼等は 好んで 樹海に住んでいた。めったに人間は 入って来ない。住むには 都合の良い場所だった。

ウルフ族は 本家側と 分家側で、その勢力を二分していた。昔から縄張り争いが 絶えず、ついに 五百年前 大規模な戦闘が 勃発してしまったのである。

分家のから使いの者がやって来た。

『話し合いに応じる。一人で来られたし。こちらも 分家の代表 一名で向かう』と言う内容の 手紙が届いた。

彼は 争いが嫌いだった。

何故 いがみ合わなければ成らないのか、何故 仲良く暮らして行けないのか、当主にも その思いをぶつけて来た。だが 彼の言葉が 受け入れられる事は 無かった。

ミラルドは 誰にも告げず 一人で出掛けた。その後を追う影には 気付かなかった。

それだけ 思い詰めていたのかも知れない。

指定された場所に着いた。一人の男が 待っていた。

「ー分家の代表の者かー」

「そうだ…。約束通り 一人で来た様だな。 感心 感心。ミラルド様、争いを 辞めたいそうだな。 ふん 愚かな。次期 当主ともあろう者が…」

言い終わると同時に 左手を上げて合図を送る。分家の者達が 取

り囲んだ。

「やはり 罠だったか…」

「ミラルド様、あなたの提案には 応じられない。…我々は 争いを 辞めない。今更 お前達への 攻撃の手を 緩めたりしない。今 我々は 黒樹様の力を お借りして、最大の力を手に入れた。今が 本家に 攻め入る最大のチャンスだ。…貴様には ここで死んでもらう。」

攻撃の合図を送る。ミラルドは 身構える。

突然 樹の上から護衛隊が ミラルドを 取り囲む様に 降り立った。

「ミラルド様、お怪我は ありませんか？」

「ああ。済まない、勝手な行動を取って。助かった…」
だが、戦いは 苦戦した。

ミラルド達が戦っている最中 分家の別動隊が 城に攻め込み、城壁の中でも 凄まじい攻防が 繰り広げられていた。

当主のエルドは、男に ミラルドを連れて来る様 命じた。

「かしこまりましたーそう言って男は 消えた。」

ミラルドの目の前に 突然 閃光が走った。流輝が現れて すぐに消えた ミラルドと 共に…。

気が付くと二人は城の中に立っていた。

「どうして 俺だけ連れ戻した。何故他の者達を 置き去りにした！」

歯をギリギリと鳴らしながら 流輝の胸ぐらを掴む。

「…エルド様に… 至急ミラルド様を お連れする様 指示を受けましたので…」つらそうにする。

「ミラルド…こちらへ…」

「何の用ですか」

「これを お前に授ける」

エルドの首に 掛かっていた 黄金色に輝くペンダントを ミラルドの首に掛け、服の中へ仕舞う。「…これは…」

「代々 当主が受け継いで来た物だ。これを持つ者こそが ウルフ族 当主である証。今からお前が 当主だ」

「何故です。僕は 当主には なりたくない。」

首から ペンダントを外そうとした その時、多くの敵が部屋の中へと 雪崩れ込んで来た。

「こんな所まで やって来たか…」

三人は 応戦しながら外へ出る。死角から ミラルドに襲い掛かって来る者がいる。

「危ない」と言って ミラルドは 押し倒された。間一髪 助かった。

「美鈴、何故こんな所に。ここには来るなと 言って置いただろう」

「ごめんなさい。でも胸騒ぎがしたの。あなたの事が 心配になって…」

兎に角 逃げようと、手を取り合って走り出した。流輝も その後 に続こうとしたが、敵が立ちふさがる。

ミラルドは美鈴を 庇いながら応戦するが 敵の数が 多過ぎる。鋭い爪が攻まって来る。バリアを張る。容易く 破られた。

「避けきれないーそう思った時に、敵との間に誰かが入り込んだ。5本の鋭い爪が 全てその人の身体の中に飲み込まれて行く。

エルドと 流輝が合流する。

「…遅かったか」流輝は 奥歯を噛み締め、三人を 少し離れた場所に 空間移動させる。ここにはまだ 敵は居ない。…美鈴…何故 俺を庇って…」

「…ミラルド…あなたが無事で…良かった…。…あなたは …生き て…生き抜いて…」

「ー美鈴ー美鈴ー」

ミラルドは美鈴を抱き締め 自分の持てる力の全てを 注ぎ込んだ。

だが、愛する人を失ったミラルドの妖力は 見る見る無くなってしまった。

心を引き裂かれそうだ。こんな想いをするのなら もう誰も 愛さない。ーみすずー

触れたら 壊れてしまいそうだった。

そこへ 敵が現れた。エルドが懸命に戦っている。流輝はミラルドを庇うので 必死だった。もうこれまでかと思った時。

「流輝よ、お前はミラルドを守れ」と言った エルドによって 谷底へと突き落とされた。

流輝には、力を発揮する暇も 妖力も 無かった。激流の中に放り出された流輝は必死に ミラルドの元へ 辿り着いた。そのまま二人は 流される。

遠くの方で 音がする。どんどん近づいて来る。…この音は 滝？その瞬間 物凄い勢いで 空中に投げ出されていた。流輝の力も限界だったが、最後の力を振り絞って 光を放つ。何とか 陸上に降り立つ事が出来たが、二人共そのまま 気を失ってしまった。幾日か経って 目覚めた時には ミラルドは子供の姿になってしまった……。

それから、時は流れ 五百年後。

戦闘（後書き）

次回から ラブ度 上がります！

診療所（前書き）

いよいよ、本文スタートです！

診療所

―お姉ちゃん！お姉ちゃん　大丈夫？　大変だ…。流輝　早く来て。どうされましたか　ラル様：あつ、すぐに　お運び致しましょう。―

―駄目です。ミラルド様。力をお使いになつては…。分かつているのですか、今の貴方は、ご自分の命を削つて、力を引き出しているのですよ。医学で治せる物は、医学で治して下さい。決して、力をお使いにならないで下さい。お願いですから…

…解つた…―

「…ん…」

ゆつくりと、瞼を開く。ぼんやりと、白い天井が見える。

「気が付いたね、大丈夫？」

男の声がした。

「こ・こ・は？」

力無い声で尋ねた。

「ここは、公園のすぐ近くに有る診療所だよ。覚えてる？君は公園に倒れていたんだ。

今は、熱も下がって、安定しているけど、脱水症状があるからね、まだ安心出来ないな」

あ…そうだ「私…昨日から熱っぽくて…それで公園通つてコンビニに、薬買いに行こうと思って、そのまま…」気が遠くなつて…

「ここに来てくれれば良かったのに。一応　病院なんだから」

そんな事言つたつて。三年ぐらい前に、気が付いたら建つてた、オンボロ小屋が診療所だなんて、…知つても来たくないじゃない。

「私は、この手伝いに来ているミラルドと言つ者です。一応医者だよ。君、名前は？」

男は、優しく微笑みを浮かべてそう言つた。

「私は、公園の向こう側に住んでいる。杉本瑞希と言います。」
そう言っただけで、自分を治療してくれた男に焦点を合わせた。

「あつ…貴方は…」

「えっ 私が何か？」

「いつ、いえ、何でも…」

俯いて、はつとする。

「あつ…今何時ですか？って云うか。何日の何時？私 どれくらい寝てました？あーどうしよう。学校に連絡してなーいっ」ガバツと起き上がり、慌ててそう言った。途端に頭がクラクラして、倒れ込んだ。

「あつ、駄目ですよ。まだ熱が有るんですから。起き上がっては、駄目です。」

「えつと、今日は23日の もう夕方だね」

「えーっ。あつ、ケータイ 取って貰えますか。先生に連絡しなきゃ」

「ああ それなら大丈夫ですよ。君の携帯、何度も鳴っていたから失礼かとは思っただけど…。出てみたら、高校の教師だって云うから。事情を説明しておいたよ。夕方には、見えられるはずだけど…」

そう言い終わらない内に、インターホンが鳴った。暫くして、男が入って来た。「杉本、大丈夫か」
ベッドに駆け寄る。

「先生、連絡しないで済みません」

「杉本は一人暮らしなんだから、気を付けないと駄目だろ」

「えつと…担任の方ですか？私は、医者のみらろ・クラウドと申します。…先程はどうも…」

「あつ、電話では失礼してしまって本当に申し訳ありませんでした。私、桜ヶ丘高校で教師をしております飯田と云います。この度は杉本が大変お世話になり、有りがとうございます。」電話での詫びもあつてか、深々と頭を下げる。

「家の者がたまたま通り掛かって。…大事に至らなくて良かったです。熱はまだ38度代ですが、安定しておりますし、…2・3日は入院して頂きますが…」

「入院ですか？」

異口同音に聞き返す。

「ええ。だつて一人暮らしなんですよ。看病してくれる人は居ないのでしょう？それなら、ここに居た方が安心です。私は今日中には新都市の方に帰るのですが、後はこの流輝に引き継ぎますから大丈夫ですよ。」

と、流輝を紹介した。

「私がこの診療所の医師で、流輝と申します。後は私が引き受けますので、ご安心されて下さい」

優しい笑顔で言った。

「杉本の事宜しくお願いします。何か有りましたら、こちらまでご連絡下さい。」

飯田は、名刺を手渡す。

「じゃあ杉本。身体しっかり治せよ。先生、後宜しくお願いします。」

と言つて帰つて行つた。

「えっと、杉本さん？一人暮らしって言つてたけど、家族の方に連絡した方が良いでしょう。」

「いいえ、良いんです。父は、私が幼い頃に病気で亡くなって、母は仕事で海外へ…。だから…」

「でも、それじゃ心配だね、一人だと…。そうだ、元気になつても遊びにおいでよ。なつ流輝」

「はい。もちろんでございます。ラル様も きっと、お喜びになります。」

ミラルドが流輝を睨んだ。

「ラル？」

「最初に貴方を見つけた子供ですよ。」

「ああ、そう云えば。あの時 子供の声が聞こえて、深いブルーの瞳が見えて、とても綺麗だなんて思ってた。…それから暖かい光に包まれて…」

二人は同時にドキツとする。

「覚えて…いるのですか？」

「いいえ。意識がはつきりしていなかったたので、所々、断片的なんです。…そのラル君は居ないんですか？お礼を言いたいんですが…」

「…ラルは…。明日の朝帰って来ると思います。今日は、友人の家に泊まって来るそうで…」

「そうですか？解りました。明日は、会えるんですね。…楽しみだな。」

「…ラルに会うのが楽しみなんですか？」

「はい。はつきり見てないけど。とても可愛いらしかったから…又会いたいと思って…」

「そうですね…。ラルも凄く心配しましたよ。でも約束があったので遊びに行ってしまったけど…」

「子供なんだもの仕方無いですよ」

「さあ、もう眠った方が良く」そう言いながら布団を掛ける。「綺麗なペンダントですね」

「ああ、これですか？」服の下から取り出したペンダントには、不思議な模様が描かれてガラスの様に透明だった。

「水晶ですか？」

「えっ…えっと、ただの硝子ですよ」

「とても綺麗」

「…御守りなんだ…」

「彼女からのプレゼントですか？」

「違うよ。そんな人は居ないさ。居たら、こんな所に手伝いになんて来ないよ」

「それもそうですね」

二人は同時に笑った。

瑞希は少しホツとする。

「今日は本当に有り難うございました」

「良いんだよ、そんな事。…こっちは仕事なんだし」

「そう…ですね…」

瑞希は目を伏せた。

お休みの挨拶をしてミラルドは病室を出て行く。

瑞希は目を閉じた。なんだか不思議…。ずっと会いたいと思っていた。二年前に公園で見かけて、それから毎日の様に夜の公園に出掛けて。ぼんやりと座って…。

会えないかなって思ってた。…夢みたい。

でも明日には、もう会え無いんだ…。もっと話し…すれば 良かった…。

翌朝。太陽の光で目を覚ました瑞希の、ベッドの脇に、男の子が立っていた。

「おはよう。良く眠れた？」

「おはよう。…ラル君？」

「うん」

「昨日は、私の事助けてくれて有り難う。」

「助けたのは、お兄ちゃんだよ」

「でも…私を見つけて、流輝さんと呼んでくれたでしょう？」

「…うん…」

「だから、有り難う。」

「うん」今度は嬉しそうに返事をした。

「あのね。ご飯食べられそう？あつ、その前に熱、計ってね。それから血圧計つと…はい、ここに腕通してね。」

計測器のボタンを押す。

「凄いね。難しい事出来るんだね。」

「うん。僕は、流輝の助手なんだよ！何でも出来るよ。」
と、せっせと動き廻っている。

本当に可愛いな…。でも。この頭上の耳と、このふさふさしたシッポは何？

シッポを掴んでみる。

ひゃつと飛び上がり、手にした物を取り落とす。

ガバツと振り返り「なっ…なっ…何を…っ」

ラルは顔を真っ赤にする。

「あっ…ごめんなさい。えっと、このシッポと耳は何かな」と思っ
て…」

「…えっと…コスプレ…」

「コスプレ？」

「…そうコスプレ。気に入ってるんだから、絶対に取らないの。触
っちゃ駄目！！」

凄いいけんまく…。

「ごっ…ごめんなさい。」

「熱、計った？」

「はい…」

体温計を差し出す。37度8分。うん、まだ下がらない…。脱
水症状は改善されている様だけど…。「流輝に食事を持って来させ
るから、待ってて」

そう言っただけで病室を後にする。

あゝあ。怒らせちゃった…。でも、そんなに怒る事かな…。機嫌直
してくれないかな…。お兄ちゃんて言っただけ…兄弟かな…。う
ん、解らない事だらけ…。

流輝が入って来た。

「お食事をお持ち致しました。」

「まだ、粥でございますが、デザートにフルーツヨーグルトをお付
け致しました。」

「わっ。有り難うございます」

「好きなのですか？」

「はい」

「あの…ラル君、機嫌悪かったですか？」

「ラル様でございますか？…いえ、いつもと変わりありませんが、どうかされたのですか？」

「えっと、私シッポを掴んじやったんです。そしたら、凄く怒らせちゃったみたいで…」

流輝は、啞然と口を開いたまま固まっていた。

「あの、流輝さん？」

はつと我に帰る。

「シッポを掴まれたのですか？」

「…はい」

「はあ…そうですか…。」

「…大丈夫です。怒ってはおりませんでしたから…あの、用事が出来ましたので、失礼致します。」

「…はあ…」

流輝は足早に病室を出て行った。

ラルは、ソファ―に寝そべっている。

「ラル様…大丈夫ですか？」

「何が？」

「その…シッポを掴まれたと聞きましたので…」
ちらりと後ろを向く。

「ああ…。いきなり、ガシッて掴まれて、マジで焦った。力が抜けて、へたり込む所だった。」

「何ともありませんか？」

「うん平気。カモ入る様になったし」と、シッポを振ってみせる。
「気を付けて下さい。シッポを掴まれ続けたら、眠ってしまわれるのですから」

コクリと頷きながら。

「いつもは帽子かぶって、シッポも服の下に隠しておくんだけど。」

失態だった。以後気を付けるよ。」

「…その…。シッポの事。聞かれたのですか?」

「ああ」

「どう応えたのですか?」

「コスプレって言った」

「なるほど。…今の時代は便利ですね」

「…そうだな…。でも、ボロが出ない様に用心しないとな」

「はい」

病状はなかなか改善されず入院して一週間が過ぎ様としていた。「なかなか熱下がらないね」「うん、37度台を　うろちよると…。食欲は有るんだけど、どうしてかしらね。」

ラルは少し考えて。

「知り合いが、大学病院に勤務しているから、血液検査して貰おうか」

「そうでございますね。細菌がいたら大変でございますし」

「えっ。血液中に細菌って。まずいんじゃない?」

「偶にあるんだ。心配する事は　無いよ」

流輝はラルに睨まれて、小さくなっている。

「もっ、申し訳有りません。動揺させる様な事を口にしてしまいました」

深々と頭を下げる。

「いえ。そんなにかしこまらないで下さい。それにしても、ラル君、お医者様みたいね」瑞希に言われ、二人はびくつとする。

「えっと…。昔から…流輝やミラルドと一緒に居たから色々覚えてたんだよ」

アハハハ。よし、良いごまかしだ。小さくガッツポーズ。

「昔からって。ラル君まだ6歳ぐらいでしょう?」

「えっ。そうそう。6歳ぐらいだよ」

冷や汗がどつと出る。

「そう云えば、ミラルドさんて 何処の病院に勤務してるんですか？」

「えっ…。ミラルドの病院？」

瑞希は頷く。

「うーんとね。…大学病院の…研究員、…してるんだよ」
汗を拭う。

「今度はいつ来られるのかな…」

「えっ…えっ…と…。あんまり休めないって言ってたから…。1ヶ月後ぐらいじゃないかな？」

瑞希は「そう」と言って肩を落とした。

何でミラルドの事ばかり聞くんだよ！！

「瑞希様は、何故ミラルド様の事ばかりお尋ねになるのですか？」
流輝に、不意に聞かれ答えに詰まる。

「…それは…」好きだからに決まってるじゃない。

「…えっと…。素敵な人だな」と思って…。」
軀が熱くなる。

赤い顔をした瑞希を見て、流輝ははっとしてラルを見た。

ラルの顔も火が吹き出さんばかりに真っ赤だ。

もしや、これは両想い？これで…これでやっとミラルド様も幸福になられる。

あゝもう、感無量でございます。

一人でやり切った感を出している流輝をギロリと睨み、その手を掴んで廊下に引つ張って行く。「流輝！何だその顔！その生暖かい顔、辞めろ！！」

「何故ですか？瑞希様はミラルド様に好意を持っておいでです。受け入れられても良いのでは、奥様も亡くなられて五百年経ちますし、もう新しい恋をされても良いのでは…」

「うるさい黙れ。俺はもう誰も愛さないと誓ったんだ。この手の話は二度と口にするな。」

何かに耐える様に拳を握り締め、唇も噛み締めて、悲し気に表情を歪ませた。

そのまま階段を駆け降りて行く。

ラル様はあの事件以来、心を閉ざしてしまわれた。

私では、そのお心を溶かして差し上げる事は出来ない。やはり異性の方でなければ…。

ラル様の時は、五百年前のあの日に止まったままなのかもしれない。

あれから何度か、瑞希の担任が友人を連れて、お見舞いに来ていた。

「杉本、まだ良くないのか」今日は一人だ。

「はい。熱がなかなか下がらなくて。今、血液を大学病院で調べて貰っている所です。」

「そうか。」

「あの…先生。ずっと気になっている事が有るんですけど…」

「何だ？」

「一番始めに来た時に、ミラルドさんにももの凄く謝っていた様な気がするんですけど…。どうして？電話で何かあったんですか？」

担任は「ああ。あの事か」と頭をかきながら。

「あの日、杉本にいくら電話しても連絡が取れないし。昼休みに家にも行ってみただけ誰も居なくて。もしかして、誘拐かと思っていた所に、男が電話に出てさ。もの凄く疑った訳だ。その…。変質者か…。」

「それであんなに腰が低かったんだ…。」

「ああ。先生には、本当に失礼な事を言ってしまった。申し訳無かったと思っている。」

「心配かけて済みませんでした。」

「あつ忘れる所だった。杉本、単位が足りない分は、夏休みに補習するからな。そんじゃ。早く治せよ。」

「えゝ、そんなゝ」と嘆く瑞希を残し、帰って行った。

ミラルドの同期に血液の分析を依頼し、それに合った抗生剤を調合し、投与した。瑞希は、あつという間に良くなった。三日後。

「流輝さん、ラル君。色々お世話になりました。」

瑞希は深々と頭を下げた。

「そうだ。ラル君、ウチに遊びにおいでよ。急に一人になると寂しいもん。明日土曜日だし、おいでよ。美味しい物 用意しておくから…。ねっ。」

「それは良いですね。是非そうされては如何ですか？」

「えっ…」

あゝ。やっぱり生暖かい目で見られてる。…何かム力つく。

「うっ…。うん…」

ラルは、横目で流輝を見ながら、そう返事をした。

ミラルドは、なかなか寝付けなかった。緊張しているのか。何故？…。

俺は、あの時誓ったんだ。もう誰も愛さないと…。だから…。拳を握る。

瑞希を初めて見たのは二年前。一目で好きだと思ってしまった。何故だか分からないけど…。惹かれてしまった。

毎晩公園のベンチに腰掛けて、物思いに更けるその横顔に。月を見上げるその瞳に…。

近づきたいと思っていた。近づいては、いけないと思っていた。言葉を交わしたら引き返せない。そう思っていた。その思いは、正しかった。

美鈴。俺はどうすれば良い？どうしたら良い？

美鈴、お前は俺の記憶からも 居なくなってしまった。あんなに愛していたのに…。

…どうして…。俺は…。両手で顔を覆う。
「俺は誰も愛さない。俺は誰も愛さない。俺は誰も…。」
呪文の様に繰り返される言葉が聞こえた。
流輝は 悲し気に 俯いた。

診療所（後書き）

もう既に、両想いじゃんと思っているかも…ですが。
生暖かい目で見守って下さい！

訪問（前書き）

人物紹介します。

ミラルド・クラウド

ウルフ族当主

身長・178？ スレンダー

髪・銀色。肩に掛かる長さ

瞳・ブルー

性格・優しくて争いが嫌い。

ラル・クラウド

ミラルドの子供の姿。

身長・126？

髪・茶色。短かめ。

瞳・深いブルー。

好物・ハンバーグ。

服装・いつも Yシャツ ジーンズ。大人になる時に首が締まる為。

訪問

ここは三十年程前、都市開発事業で開拓された比較的新しい街で。銀行員だった瑞希の祖父が、妻と幼い娘と一緒に越して来た。

ありとあらゆる施設が整然と配置され、かなり住み良い街になっている。

瑞希の母は 結婚して一旦はこの土地を離れた。が、夫の死をきっかけに 娘と一緒に戻って来たのだ。

実家に戻って来る様に声を掛けてくれた祖父母も、瑞希が中学の頃に病気で相次いで亡くなった。今は、母と娘の二人で住んでいる。

ピンポーン。インターホンが鳴る。

「はい」瑞希は、勢い良く扉を開けた。

そこには、ブルーの瞳を大きくしたラルが立っていた。

「いらっしやい。ラル君。待ってたよ！」

瑞希は、微笑みながらそう言った。

「こんにちは。遅くなってゴメン…。もっと早く来ようと思ったんだけど…。」

両手をもじもじさせる。昨夜寝付けなかったラルは、寝過ごしてしまったのだった。

「良いのよ。来てくれたんだもの。さあ上がって！」

「うん。身体の調子はどう？だるい感じとか、熱っぽいとか無い？」

「薬ちゃんと飲んでる？」

「ふふっ…。大丈夫よ。薬もちゃんと飲んでるわ。心配性ね。」

「そっか、なら良いんだけど」

ラルは ほっと息をつく。

「さあ入って」と、リビングに通された。甘い香りが漂ってくる。瑞希は「ソファア」に座って待ってて」と キッチンへ入って行く。

ラルが珍しそうに部屋中をぐるりと見回していると。

「古い家でしよう」と瑞希がトレイを手に戻って来た。

焼き立ての菓子とカップが乗っている。

「クッキーとマドレーヌ。焼いてみたんだけど、お口に合うかな。

食べてみて！」

とラルの前に皿を置く。

「はいどうぞ」の声に子供らしく「頂きます」と元気に言って、クッキーを一枚。口の中に頬張る。

「ん！美味しい。」

お世辞ではなく、本当に美味しい。

「良かった。喜んでもらえて。私　お菓子作るの　好きなの。」
につこりと微笑む。

ココアも飲んでみる。甘くてほろ苦い感じがする。コーヒーの香り？不思議な顔でカップの中を覗き込む。

その顔を見て瑞希は。

「ふふふっ…。それココアじゃ無いのよ！カフェモカって言うの。

マイブームなのよ」

「美味しいよとっても。この味好き！」

「そう？良かった。気に入ってもらえて」

「瑞希…。一人で住んでるんだよね。淋しくない？僕なら淋しいな」

「そうね。淋しくないって言ったら嘘になるけど。母は、私を育てる為に一生懸命働いてくれているから…。少しは我慢しなきゃね」

と笑った。

「ラル君のお父さんと、お母さんは？」

「うんとね。お母さんは僕を産んで産後の日だちが悪くて、すぐに死んじゃって。お父さんもずっと前に死んじゃった。」

あっけらかんと答える。

産後の日だちって…。

「そうなの…。ごめんね。辛い事聞いて。ラル君も淋しい思いをしているんだね。」

「うん。流輝が居てくれるから、淋しいって思った事なんて無いよ。」

「そう…。流輝さんの事頼りにしてるんだね。お父さんみたいな存在かな？」

「そうだね…。僕の右腕って所かな？」

「みつ…。右腕？」

「うんそう。流輝の作る料理って凄く美味しいんだよ！料理好きの瑞希と話しが合うかもね。」と笑っている。

「そつ、そうね。…ところで、流輝さんとラル君ってどういう関係なの？」

「えっ……………」

不意に聞かれ答えに詰まる。

「うんと…。えっと…。それは…。僕のお父さんの秘書だった人で、今は僕に付いていてくれてる。…父が亡くなる時に俺の事を頼むって言ったらしくて…」

大人っぽい口調で話す。

ラル君って不思議な子。大人っぽい顔をしたり、子供っぽい事言ったり…。

「そう…。秘書なんだ…。秘書付きの6歳児って…。

「ラル君って6歳だよ。幼稚園とか行かないの？」

「うん。楽しくないから行かない」

「でも幼稚園行ったらお友達、沢山出来るよ！」

「うーん、だって話しが合わないし…。ウザイじゃん。先生とか…」

「

「そつ…そつ」

「やっぱり子供っぽく無い。

「それにさ…」大人っぽい顔。

…生きる時間が違うから。

「友達になっても」人間の方が先に死んじゃうじゃん。

瑞希も俺より先に、いなくなるんだ…。と、俯いて悲し気に微笑ん

だ。

「友達になつても…何？」…何でもない…。」

「そうだ。晚ご飯食べて行かない？何が良いかな？」

「うん。どうしようかな…。ご馳走になろうかな…。ハンバーグ食べたい。」

赤い顔をして、俯きながらそう言った。

「よし！ハンバーグね。材料も揃ってるし。大丈夫！作れるよ！…それじゃ、手伝ってくれる？」

「うん良いよ！」

瑞希は「ちよつと待っててね」と言つて二階に上がって行き、エプロンを手に戻つて来た。

瑞希は赤地に白いドット柄。ラル君はこれつと、白のフリルがたっぷり使つてある。レースのエプロンを手にしている。

えっ。こつこれ着けるの？と二、三步後ずさる。

瑞希に身体を掴まれて、無理やり着せられた…。

恥ずかしい…のに。あるうことが、それを可愛いと写真に収めている。ああ。何て事だ…。

気を取り直してハンバーグ作り。瑞希の指示でラルは、テキパキ動く。

「ラル君凄い。いつも手伝ってるの？」

「うん。いつもは何もしないけど…。やろうと思えば出来るよ！」と言つ。

「そうなの…。じゃあどうしてお手伝いしないの？」

「流輝が嫌がるから…。ラル様は何もなさらないで下さい！」つて言つて、全部自分一人で何でもやっちゃうんだよ！」と言つ。

「へえ…そうなんだ。そう云えば、ミラルドさんとラル君って兄弟？」

「うん違つよ。従兄弟なんだ。えつとね、ハーフって言つなの？」

「ふんそうなんだ。ミラルドさんとは何でも話すの？」

「うん。ミラルドの事なら何でも知ってるし、僕の事もミラルドは

何でも知ってる。」

「そうなの…仲良しなんだね。じゃあラル君にとってミラルドさんは、お兄さんみたいなものかな？」

「…ミラルドは僕にとつて…分身…かな」寂しい顔で言う。

「分身？どう言う意味？」

「…なんでも無い。…そうだね。兄ちゃんかな…。まっ、何でも良いじゃん。早く食べようよ！」

「あつ。そうだね。食べようか。」

二人で食器を並べたり、食事の準備を済ませ席に着く。

「わあ、美味しそう。頂きま〜す」一口頬張る。

「う〜ん。美味しい。瑞希って天才だね。」と言って 黙々と食べる。

「天才は大袈裟だけど…嬉しいわ」と言って瑞希も食べた。食事を終えた後、片づけを済ませソファで くつろぐ。

「何か飲む？」「う〜んと。紅茶有る？」

「インスタントなら有るよ。それで良い？」

「うん。じゃあそれ、お願い。」「分かった。待っててね」

「お待たせ」と言いながらカップを手渡す。

「ありがとう」と言って一口飲む。

「ごめんね。インスタントしかなくて。今度 流輝さんに ちゃんとした茶葉の入れかた 教えて貰うね。」

「うん。…これは、これで美味しいよ。」

「…なら…良いけど…」と瑞希は申し訳無さそうに言った。

テレビでも点けようか？と言ってスイッチを入れる。二十年前から三十年前に流行った歌番組が放送されている。

「うわ〜懐かしい。」と、ラルが感嘆の声を上げる。

「えっ…懐かしいって…」流れる曲 全てを一緒になって歌っている。

なっ何でこんなに歌えるの？私だって知らないのに…。

「ねえ、ラル君どうしてそんなに古い曲を知ってるの？」

「えっ」ラルははつとして、しまった―と思う。どっ…どうしよう…。
「えつとね…。うーんと…。あつ、そうそう　流輝が良く歌ってたから。覚えちゃった。」

「ああ。そうなんだ」。凄いね。私知らない曲ばかりよ！」と納得してくれた。

はー。助かった。ほつとする。

「僕、もうそろそろ帰るね」

「じゃあ送って行きましようか」

「大丈夫だよ。一人で帰れる。それじゃあご馳走さまでした。ちゃんと薬　飲んで、暖かくして寝るんだよ！」

「あはははっ。心配性ね。ちゃんと薬飲んで寝るから。じゃあ気を付けて帰るのよ。流輝さんに宜しくね。」

「うん。じゃあバイバイ。」と手を振って帰って行った。

やっぱりラル君って変わった子一緒に居て全然飽きないな…。お風呂に入って、さっさと寝よう。じゃないと怒られちゃう。

ラルの怒った顔を想像してみる。うふふ…。

「怒った顔も　可愛いんだろうな」と言っただの中へ入って行った。

ラルは　公園の中を通って診療所へと向かって歩く。

今日は楽しかったな。瑞希って本当に料理上手だな。良いお嫁さんになれるかも…。

…お嫁さんか…。

瑞希が誰かの物になる…。あの笑顔が俺じゃない他の誰かに向けられる…。そんな事になったら俺はどうするだろう。黙って見ていられるのか…。俺は…耐えられるのか…。

足取りが重くなる。胸が苦しい。ブランコに腰掛けぼんやりと考える。

答えなんて見つからない。出口の無いトンネルの中を　さ迷っ

る様だ。

物思いに更けるその横顔は、とても子供とは思えない 大人っぽさが伺える。

首からぶら下げているペンダントを取り出し、月にかざしてみる。無色透明のはずが、濃いピンク色になっている。

このペンダントはウルフ族当主だけが持つ事が出来る紋章と云われる物で。愛情で満たされると真紅に染まる。

ミラルドの父親が着けていた時には、黄金色に輝いていた。複雑な思いで 紋章を見つめる。

「ラル様 もうお帰りでございますか。瑞希様のお宅は、いかがでしたか？」

流輝が近ずいて来る。ラルの手に握られている物を目にし、

「―それは―」そう言って口をつぐんだ。

「なあ 流輝…」

「はい。何でございますか？」

「この紋章。親父が着けていた時。それを受け継いだ時も、金色だったな…。どうしてだ。…俺は 紋章に認められて無いと言う事なのか…。」

「それは…。」一時考えてから口を開いた。

「エルド様にお尋ねした事は ございませんでしたが。…そうですね…。迷いなく誰かを愛する心。仲間を思う心。そして自分を愛する心。全てが揃った時に 黄金色に輝くのではないかと考えます。」

「…そうかも知れないな…。」

俺は、いつも迷ってばかりだ。自分の事も 愛してはいない気がする。

ただ無駄に生きているだけ…。

ラルは、淋しい笑みを浮かべた。

訪問（後書き）

大学ノートに 90ページ程綴っている物を 携帯に打ち込んでいます。

文明の力をなかなか使いこなせず…。先が 長いデス！

銀牙（前書き）

敵 登場です！

人物紹介

流輝 ミラルドの秘書。

身長 180？ スレンダー！。

髪 黒色 短髪。

瞳 茶色。

性格 物腰が柔らかで 人が良い。

時々 暴走します。

杉本瑞希 高校二年生。

身長 160？ 中肉中背。

髪 茶色。肩の長さ。癖毛

瞳 茶色。

性格 明るく、何処にでも居る普通の子。

総樹（樹の神）に 一目置かれる。

ウルフ族の 鍵と成る女の子。

銀牙

5階建てのアパート。最上階 東向きの角部屋。夕方4時 銀牙はベッドの中で目覚めた。

「あゝ寝足りねえ」カーテンを開ける。

「雨が…うつつとしいな。」

裸のまま ベッドから抜け出し シャワー室に向かう。

蛇口をひねり頭から湯をかぶる。「んゝ、気持ち良い」

ひとしきりシャワーを浴びた後 無造作に身体の水気を拭き取る。

「あゝさっぱりした」

頭をタオルで拭きながら携帯を取り出し電話する。

「あつケイコちゃん？俺、牙だけど、今日お店来られる？」

「マジ？同伴してくれるの？」

「うん、うん。じゃあ ファミレスの前で…6時だね。食事してから…。うん、じゃあ 後で。」

電話を切って「よっしゃー」と左手の拳を天井に向かって突き上げる。

小麦色に焼けた 引き締まった身体の上にシャツを羽織る。左右の耳には ピアスが5個、頭上は短髪 後ろは長く。ブランドの服と靴で 身を固め 5時半、アパートを後にした。

銀牙は ウルフ族の分家の者だ。

五百年前に戦死した者達の復讐を心に誓った。

当主を捜し出し、その命と 紋章を奪う為、この街にやって来た。

ウルフ族は 愛した人間と一生を共に過ごす為に、永遠の命を与える事が出来る。

しかし、相手が 誰でも良い訳ではなく。ウルフ族でしか 分らない 適合者でなければならぬ。

儀式はごく簡単なもので、愛する人の首筋に自分の牙を食い込ませ、

体液を少量 注入するだけで。

適合者ならば 永遠の命。それで無ければ、中毒症状が出 痙攣を起こし、最悪の場合 死に至る。

銀牙は 人間の愛情を手つ取り早く手に入れる為に、ホストクラブで 働いていた。酒を飲んで 女の相手をするだけで、金を稼げて 妖力も手に入る。生き易い世の中になった。

昔は生きて行くのが難しかった。あの頃は何でもやった。でも 結局は夜の仕事が一番やり易かった。俺にはこんな場所が似合ってるって事だよな。とは言え 偽物の愛情は 持続性が無く 不安定で パワーに欠ける。早く本物の愛を手に入れないと…。

先輩ウルフの話では、本物の愛情を手に入れると 妖力のパワーが 違うらしい。身体中に漲って来る感じって云うか、溢れ出ると云うか、全く違うらしい。俺も早くそんな体験をしたい。

…適合者が…。やっぱり これを探す方が先かな。ミラルドを探し出したとしても 俺が弱かったら、紋章も 命も奪えないもんないよ！決めた。女を探そう。女！「ケイコちゃん今日泊まってく？」

「ええ 良いわよ」

「よっしゃ、じゃあ一緒に出ような！」

二人は早目に店をでて 銀牙の家へ帰って行った。

朝 目覚めてみると、ケイコは もう出掛けた後だった。『夕べは楽しかった。又誘ってね』と、携帯にメールが入っている。

何でも どこかの社長秘書をしているらしい。金持ちなのだ。仕事に忙しく 出会いが無いので、たまにああして ホスト達を金で買っているのだ。

色んな女が居る。…この世は 金が全てだな。女なんて 妖力を生み出す為の ただの道具にすぎない。ずっと そう思って生きて来た。これからも その考えは 変わらない。

大人の女には ホストクラブや、繁華街で会えるけど、そうだな…
まずは高校に行ってみるか。身仕度を整えて アパートを出る。取
りあえず 西に向かって歩いて行く。ずっと登り坂が続いている。
この先に高校つて有るのかな…。頂上付近は 緑が多く公園っぽい
けど…。

坂を上がりきり 少し平坦な道が続く

『桜ヶ丘学園』うーん 高校かな？

学生達が 登校して来る。おっ 可愛い子 多いな…。男も居る。
共学か…。よし！と、学園内に入って行く。

事務室で 学園長室を聞き、校舎の中を進んで行く。

ノックもせずに部屋に入り、驚いている学園長に向かい 両手をか
ざし 妖術を使い、自分を転入させる様に 操った。

いつもは、青年の姿をしているので もっと若く 変化する。

学園長に用意させた 制服に着替える。鏡の前でポーズを決める。

学園長に連れられ二年の教室へやってきた。自己紹介し ニコツと
微笑む。

女の子達が キャーキャー騒いでいる。やっぱ俺って 人間に 馴
染むの 上手いね、天才的！ さてと。女、女、誰から行こう
かな…♪

瑞希の通う高校は、街から見上げた所の高台に建っており。幼稚園
から大学までの一貫教育で、部活動にも力を入れている。

瑞希のクラスに転入生がやって来た。名前は 山本銀牙。茶色い髪
を短めに切り。だらしなく着た制服の胸がはだけていて、動く度に
チラリと小麦色に焼けた裸が見え隠れする。

見た目は ちょっとワイルド、少し笑った口元には、八重歯のよう
な 牙のような…？ 格好良さから クラスの女の子達には 大人

気だった。

頭も良く、スポーツも 何でもこなす。

見た目のワイルドさとは裏腹に、物腰が柔らかで、笑顔を絶やさず、そのお陰で 男女問わず すぐに沢山の友達が出来た。

山本銀牙は いつも女の子達に取り囲まれて、「彼女居るの?」とか、「誕生日いつ?」とか、「何処から転校して来たの?」と、毎日 質問攻めに合っているのだ。

だが、瑞希には 全く興味が無かった。ワイルドで ちょっとは格好良いけど、断然 ミラルドの方が魅力的だ!!

この学校に入って一週間が過ぎた。…近寄って来る 全ての女子の 瞳を覗いてるけど、適合者ってなかなか居ない物だな。後 1 ヶ月この学校に居て 適合者が見つから無かったら、他の 学校に行ってみるか…。それにしても、このクラスに 俺に興味を示さない女が二人も居る。有り得ない。皆 俺を 好きになる筈なのに、フェロモンも 目一杯 振り撒いているのに。俺になびかないなんて、本当 有り得ない。…男嫌い とか?

ここには 若い教師も居るから そっちも 確認しておくか。ん? あの先生…もしかして ケイコちゃん?

うつそ!マジで社長秘書だって言ってたのに…。この前 エッチしたばっかじゃん…。

ホストの俺とは 気付かないだろうけど…。と思いながら すれ違う。

「ちょっと君」呼び止められた。

「…ハッ…ハイツ」緊張する。

「あなた…何処かで 会った事あるかしら…、もしかして お兄さん いる?」

「いつ、いえ 一人っ子です…」

「そう…まっ 良いわ。それより制服は もう少しきちんと身に着

けなさい！」

と 一番上のボタンを留め、ネクタイも きつくしめ直してくれた。
「よし、これで良いわ。でも本当に似てるわね…」と言いながら歩いて行つた。

その後ろ姿を見送っていると、クラスの男子達が 寄つて来て。

「良いな」銀牙。ケイコ先生に ネクタイしめてもらつて…。俺達の 憧れの 先生なんだぞ！！この…っ、羨ましい奴め！！」

と 思いつきり首を絞められる。笑いながら よせよと 抵抗する。

午後4時。銀牙の 携帯の着信が 鳴つた。見てみると ケイコちゃんからだ。

「えっ ケイコちゃん…」

「あつ、もしもし ケイコちゃん…どうしたの？」

「もしもし 牙君 …えつと…あなた 弟つて居る？」

「いや、居ないけど…、それが どうか した？」

「今日 似た人を見かけたから…」

「俺に 似てるの？」

「ええ…」

「この世には 自分に似た人が三人居るつて 云うじゃん。きつとそれだよ！」

「そうね…、考え過ぎね…。ねえ…又 お店に 行って良いかしら」

「ああ良いよ。じゃあ 金曜日に しようよ、ゆつくり泊まれるだろ？」

「ええ じゃあ 金曜日に 又連絡するわ」と言つて 電話が 切れた。

あゝびつくりした。まさか 校内から ホストに電話かよ、度胸あんな ケイコちゃん…関心する。俺は 店の客に手を出したりしない。でも ケイコちゃんは 金をくれるから 相手をした。金持ちだと思つていたのに、教師だったとは…。女つて生き物は、全く分らない。

金曜の夜。この日は 直接来店して貰った。店が終わった後 又二人で銀牙のアパートへ 帰る。二人でシャワーを浴びて ベッドに入った。

次の日 のんびりと ベッドの中で目を覚ます。今日は 土曜だ ゆっくり出来る。

学校に通っていると、朝が早くて 凄くきつい。身が保たない。ケイコもゆっくりと目を覚ました。小さく伸びをする。軽く唇を交わし「飯でも食いに行くか？」の問いに 小さく頷く。

身仕度を済ませ、二人で近くのファミレスに入った。席に着いて、モーニングセットを注文した。

ケイコちゃんって 真面目で キツそうに見えるけど、夜は 激しいんだよね。でも 適合者じゃ無い。残念…と ケイコの顔をじつと見つめる。

「何 どうしたの？」と聞かれ「いや 何でも無い。」と 答えた。店を出て そのまま別れ、アパートへ帰った。

「あゝゝもう一度寝よう…」と ベッドに倒れ込み 眠りに着いた。

それから一週間が過ぎた頃 ケイコから電話が 掛かって来た。

「もしもし 牙…」

「ん？ケイコちゃん どうしたの？何か あった？」

「うん…。私 この街 離れる事になったの…」

「えっ 何で、社長秘書も辞めちゃうの？」

「ええ…親に お見合い 進められて…とても 断れる雰囲気じゃ無くて…」

「そうか、色々大変なんだな」人間も…

「私 あなたの事 結構 気に入ってたのよ」

引き止めて欲しい。ケイコは そう願った。

「俺も気に入ってた方かな…じゃなきゃ寝たりしないよ。まっ新しい男と 上手くやれよ」

「そう…ね…。頑張ってみるわ…」そう言って電話は切れた。

俺に引き止められる訳無いだろうが…。銀牙は 屋上の手摺りを殴った。

そこへ ケイコ先生がやって来た。

「あら…君…。何してるの?…」

「…空を見てた…」

「そう…」

「先生…仕事 辞めちゃうの?」

「えっ、どうして知ってるの?」

「ああ えっと… 立ち聞きしたから」

「ええ…実家に帰るの…。好きな人にも 振られちゃったしね…」

銀牙の顔を 愛おしく見つめる。

「好きだったの…とても…」

銀牙の頬に触れる。

「キスして良い?」

銀牙は 少し驚いたが「いいよ」と答えた。

優しく唇を重ね、そっと離れて ケイコは涙を流し さようなら

と囁き「ありがとう」と言っ て 屋上を後にした。

それから 又何日かして、

「なあ、聞いたか?」と友達が銀牙に話しかける。

「何を?」と尋ねると

「ケイコ先生の事だよ!」

「辞めるって話しか?」

「そうじゃ無くて、いやその事なんだけど。理由だよ、学校を辞め

る 理由!」

「知らない。」

「何でもな ケイコ先生、ホスト通い してたらしいぞ。その事がばれて、教育委員会で 問題になって 辞めさせられたって 話し。」

「それ、本当かよ!」

「ああ 間違い無い。」

まじて。俺のせいかな…。
ケイコに電話してみる。繋がらない。番号を変えてしまったらしい…。悪い事したかな…。
まっ でもケイコちゃん 適合者じゃ無かったし。俺には どうしようも無いしな。ドンマイ！と、そこらの女の子に声を 掛けまくった。

「えー。１１月に創立祭が行われます。まだ少し早いのですが 実行委員を、男女二人づつ選んで下さい。自薦他薦は問いません。我こそは！と言う人は 居ませんか？」

と 担任が声を掛ける。誰も手を挙げない。仕方無いな〜と 言いながら、白紙を配って行く。

「では その紙に男女一人づつ推薦する人の名前を書いて、この箱に入れて下さい。」

瑞希は う〜ん・と考えて、女の子は、橘 葵 さんで、男の子は、相沢君。よしっ 紙を四つに折り 前に置かれている箱に入れる。集計結果が 黒板に書き出された。

「男子は、相沢 拓海・山本 銀牙、女子は、橘 葵・杉本 瑞希。決定！」

「え〜〜〜っ、私〜〜〜っ？」

「意義は、認めん！」

と 先生が言う。

トホホ…、瑞希は観念し 肩を落とす。

放課後 女の子達が 瑞希の周囲に集まって来た。

「瑞希、良いな〜。銀牙君と一緒になんて〜」「羨ましい」などと口々に言っている。

「じゃあ 誰か 変わってよ！」と言ったら「だって」「ねえ〜」「もう 決まった事だし〜っ」「まっ 頑張ってね〜」と 皆帰って行った。薄情者！心の中で 叫ぶ。

あゝあ、葵ちゃんか。チラツと見る。あんまり 話した事無いんだよね 何処かの社長令嬢って話しだけど…住む世界が違うって感じよね。相沢君は中学校からの同級生で、割と話す方だからまあ良いけど。問題は 山本銀牙。チャラチャラしてて、どうも苦手!!

翌日、二年生の実行委員が 図書室に招集された。11クラス 4名の生徒が 集まった。

「今年の桜ヶ丘学園、第四十回創立祭の 実行委員長に成りました、三年F組の山根俊彦です。今年の 創立祭が成功する様に力を貸して下さい。皆で良い創立祭にしましょう。つきましては、二年生の代表を6人選んでいただきます。」
と、三年の代表が挨拶した。

「どうせ決まらないと思うのでくじで決めましょう。」

6人の名前の中に、自分の名前と 銀牙の名前が有った。

…最悪…。 銀牙と関わるつもりは 全く無かったのに、二年の代表に成ってしまった。

今日は 夏休み最後の 委員会だ。嫌な事は 早く行って 早く済ませたい。

「委員会が始まるわよ。早く行きましょ!」

銀牙は、ぼつと している。

あゝこの学園には、1ヶ月しか居ないつもりだったのに、創立祭の実行委員に 成っちゃったな。適合者探し出来ないじゃん。参ったな。と考えている。

瑞希は、両手で 机を叩き 銀牙の瞳を覗き込む。

「聞いているの?委員会が始まるから 早く行くわよって、何回言わせれば気が済むの!!」

この男……。だんだん ぶん殴りたくなってきた。

突然 銀牙は立ち上がり、瑞希の 頬を両手で挟み込む。そしてじゅつと 瞳を見つめられた。

「なっ 何するのよ！離なさいよ！！」上手く声が出て来ない。
手を振りほどこうとするが、びくともしない。

…こっ これは…俺のマークとそっくり。…ちよっと違う所もある
けど、これだけ似てるマークは 初めて見た…。

そして 銀牙は、瑞希の顔を引き寄せて キスをしようとした。

周りに居た女の子達が ざわめく。瑞希は 思いつきり 銀牙の右
頬をひっぱいた。

「何考えてんのよ！馬鹿！」

銀牙はキョトンとしている。今まで 女の子にキスをしようとして、
殴られた事など 一度も 無かったからだ。

瑞希は「もう 最低！」と言って教室を出て行く。銀牙は 女の子
に 初めて嫌われた。

銀牙（後書き）

読んで下さいまして 有り難うございます。
次 瑞希の 危機です！
入力 頑張ります。

侵入者（前書き）

人物紹介

山本銀牙 ウルフ族 凶族

身長 170? スレンダー！。

髪 茶色 短め。

瞳 茶色。

性格 楽しい事好き。

ホスト名 牙^{きは}

年齢 28歳

髪 上は 短髪 後ろ長め

茶色に銀のまだら

橘 葵 瑞希の同級生。金持ち

身長 164? スレンダー！。

髪 黒 腰の長さ。

瞳 黒色。

性格 頭が良い。優しい

合気道 薙刀が得意。

侵入者

夏休みも 一週間が過ぎた。

銀牙は ブラブラと街を歩き回っていた。

何か 面白い事無いかな…。

いつも、適合者を見つける為 女の子達の瞳を 覗き込んでいる。その 強引さが受けて、休日になると デートの申し込みが殺到するのだ。

今日も 約束があつたのだが、急な用事が出来たと メールが届いた。

午前中は、睡眠時間なので デートは 4時以降と している。高校に通う様になっても 収入が無くなるのは 都合が悪いので夜の仕事は 続けている。

とは言え 仕事も 繁華街も時間が早過ぎるので。

今日は 気分転換に学園の方へと向かつて行った。

ブラブラと歩いていると 桜の木が 沢山立ち並ぶ通りに出た。良く見ると そこは 公園だった。

「へー公園か」。結構広いじゃん。遠くまで足を運んで 正解だったな。」

駐車場を通り抜け 公園の土の上に足を踏み入れる。

右手に砂場、目の前にジャンゲルジム、左手には ブランコや滑り台などの 遊具が有る。身体が むずむずして来る。遊ばずにはいられない。こう云う物は、めちゃくちゃ好きな タイプである。ブランコに飛び乗り、立ち漕ぎを始める。一番大きく揺れた何処で ジャンプ！華麗に着地する。子供達は、羨望の眼差しで見つめている。

あつと云う間に子供達を子分に従え、滑り台や アスレチックで遊び出す。無邪気だ！

終いには、ジャングルジムのてっぺんに立ち ポーズを決める始末、猿山の大將と 言ったところだ。

暴れ過ぎてお腹が減った銀牙は、子供達に手を振って 別れ、公園の中を歩き出した。

芝生を踏みしめ、すり鉢状の園内を下って行く。

中央に有る池の中を覗いてみる。沢山の魚が 泳いでいる。近くの箱の中に有る餌を買い、池に投げ入れた。水面が激しく波立つ。それが楽しくて何度も 投げた。全ての餌が無くなると、今度は 下りて来た方とは 逆の方へと向かって歩き出した。

つつじの植え込みを 抜け、遊歩道を 突っ切って 桜の木の下に立つ。ふっと 遠くを見つめると「あれは……杉本瑞希を 発見！ーラッキーと 右頬を釣り上げニヤリと笑った。

瑞希は つけられている事にも気付かず ポケットから鍵を取り出し、家の錠を開け 扉を開いた。それと同時に、無理矢理 男が 侵入して来た。

二人共 中に倒れ込み、イタタタタ……と 頭を押さえ上体を 起こし 男を見る。

「……あつ……山本銀牙！」銀牙は ゆっくりと起き上がる。

「なっ 何よ 何の用？用事が無いなら早く出て行って！」扉を指さす。

しかし、銀牙は 出て行く処か 不適な笑みを浮かべて、

「この前の続きをしようか」

と 近づいて来る。

瑞希の顔が 見る見る強張る。徐々に階段に 追い詰められて行く。不意に 跳び掛かって来た。それを間一髪の所で 交わす。

銀牙は本気だ……。二階に逃げるしか無い。

階段を上る。手近なドアに飛び込む。ドアを閉め鍵を掛けた はずだった。扉の隙間に手を掛け、物凄い力で開ける。もう……逃げ場が無い……。じりじりと後退る。

「もう観念しろよ」銀牙がニヤける。又 一步下がった所で ベッ

ドにぶつかつた。その途端 押し倒され 銀牙が馬乗りになつた。
瑞希は 物凄い力で抵抗する。手足をばたつかせ、爪で引つ掻いたり、殴つたり。しかし 何の抵抗にも成らなかつた。銀牙は右手で瑞希の両手を捕み、頭の上に押さえつける。

「やっ 止めてよ…」

やつとの思いで 絞り出す。

銀牙の顔が 近付いて来る。瑞希は 顔を 背ける。銀牙はそのまま 瑞希の首筋に愛撫する。――いやっ 止めて――声が出ない。顔を上げ、瑞希のあごを 人差し指と 親指で 挟み 唇を押し付けて来る。瑞希はギュツと目をつぶる。

（ファーストキスだつたのに…こんな奴に奪われるなんて…）涙が滲む。

あるう事か 銀牙の唇は そのまま下の方に下がって行く。ブラウスのボタンが 一つ又一つ 外されて行く。「！！」（いやっ こんなの嫌！）

「いや〜〜〜！！！」

ラルは、診療所の午後の診察を 早めに切り上げ、瑞希の家に やつて来た。今日は、瑞希に 夕飯を招待されたのだ。

「瑞希 居るかな？」

インターホンを押そうとして 手を止めた。玄関の扉が少し 開いている。（泥棒？）泥棒なら、扉は ちゃんと 閉めるよな…。

「お邪魔しまゝす」用心しながら 中に入る。

「瑞希。僕だよ…、ラルだよ。居ないの？」

呼び掛けた時に、瑞希の 悲鳴が 聞こえて来た。

二階からだ！慌てて掛ける出す。部屋の扉を開けて中に入る。瑞希が男に襲われている。

「何してる！止める！」

銀牙は チラリとラルに目を向けたが、再び瑞希の首筋に顔を埋め

る。ラルの事など相手にして居ない。

「僕、誰か 呼んで来る！」

とつさに そう叫んで 外に飛び出た。

銀牙は、「チッ」と舌打ちすると、慌てて 後を追って外へ出た。その姿を 見送って、扉の影に 隠れていたラルが顔を出す。

「瑞希…大丈夫？ 怪我は無い？」

瑞希は、ベッドの上で身体を 小さくして、自分自身を抱く様に して 泣いていた。

ラルはベッドによじ登り、小さな両腕を 精一杯伸ばして、震える身体を抱きしめた。

「…ラル…」瑞希は小さなラルの身体を抱き寄せ、すつぱりと両腕で包み込んだ。

ひとしきり泣いた後「助けてくれて… 有り難う…」と 言った。ラルは小さく 頷く事しか出来なかった。

…僕が 大人の姿なら 瑞希を 両腕に包み込んで 抱きしめてあげられるのに…助けを呼びに行かなくても、 あんな奴 殴り飛ばしてやれるのに…。

やり場のな無い 怒り どうにも出来ない悔しさ。今日程 大人に成れない自分が、情け無いと 思った事は なかった。瑞希を守りたい。心から そう願った。

瑞希が落ち着きを取り戻した。紅茶を差し出す。

「有り難う」と言って、両手で カップを受け取る。「…温かい…」

「飲んで。落ち着くよ。…美味しいか どうかは、分から無いけどね」

うん。と言って 一口飲んだ。「…美味しい…」

「僕が付いているから、少し眠ったら？」

「うん そうさせて貰うね」そう言って 眠りに付いた。

ピンポン。インターホンが鳴った。流輝が立っていた。

「なかなか お帰りに なりませんので、お迎えに 参りました。」
「流輝…。悪いけど、今日は帰れない。」

「どうか…されたのですか」

「ああ…。今は 瑞希を一人に 出来ない。訳は聞かないでくれ」

「では、明日の診療は 休業 致しますか？」

「そうだな、そうしてくれ」

「かしこまりました。では、私は 戻ります。」

「お休み」

ラルは、再び二階に上がり 瑞希の眠る部屋へと向かった。ベッドの脇に移動させた椅子に、ちょこんと座る。

瑞希の寝顔 今日初めて見る。けど…、前にも 何処かで見た様な…。駄目だ…、思い出せ無い…。頭痛がする。五百年前の事件…。あの頃の記憶が曖昧で…何か とても大事な事も 忘れてる気がする。美鈴の顔でさえ…はつきりと 思い出せ無い。頭痛が 激しくなってきた。

両手で頭を押さえ、椅子の中で小さく うずくまる。

「…ラル…」

名前を呼ばれて 顔を上げる。瑞希がベッドに座っている。

「あつ、瑞希。気分は どう？大丈夫？」

「うん 大丈夫よ、ずっと付いていて くれたの？…有り難う…」
ぐくくくくくくくく「！！」ラルのお腹が鳴った。夜中の1時を回っている。

「ごめんね。夕飯、食べ損なっちゃったね。遅くなっただけど、何か作ろうか？」

ラルは 顔を赤くして 頷いた。

キッチンに入り 瑞希は手早く焼きそばを 作ってくれた。

「ごめんね、こんなもので」

「うわゝ 美味しそう。僕 焼きそば 大好きだよ！いったただきまゝす」

瑞希は、口一杯に頬ばって食べる姿を 微笑んで見ている。

「瑞希は食べないの？」

「うん 食欲が無いし、こんな時間に食べたら太っちゃう」

ラルが食事を終わると、それを待っていた様に、瑞希は シャワーを浴びに 行った。

「ラル、今日は有り難う。 凄く心強かった。 もう遅いし、帰って良いよ 流輝さんも心配してると思うし…」

シャワーを終えて 戻って来た瑞希が言った。

「大丈夫だよ！流輝には 今日泊まるって言うてあるし、それに何より、俺が瑞希と一緒に 居たいんだ！！」

「…有り難う。…ラル」瑞希は 涙ぐんだ。

「じゃあ、遅いし 寝ようか」

「うん」と言って、二階に上がって行く。

瑞希がベッドに入る。掛け布団を持ち上げ、

「さっラル君も どうぞ」

「えっ…、一緒に寝るの？…」

「ラル君ってば おませさんね、サッサと入って」

無理矢理ベッドに引っ張り上げる。

「分かったよ」と、渋々 布団に潜り込んだ。

朝日がカーテンの隙間から 部屋の中に差し込む。ラルは眠い目を擦る。あんな横顔見ながら、眠れる訳がない。結局 一睡も 出来なかった。

朝食を終え、ラルは瑞希を公園へと連れ出した。深呼吸する。朝の澄んだ空気で 肺を満たす。

園内を ゆっくりと 時間をかけて散歩する。

「昨日は有り難う。…ラル君が居てくれて 良かった。…あの後…私 一人だったら…不安で 怖くて…。…どうなっていたか分からない…」

「僕は、…別に大した事 してないよ…何も して上げられなかつ

た。」

ギリギリと唇を噛み締める。

「そんな事ない。ラル君は私の頼もしいナイトよ！」

笑顔で言う。瑞希は 不意に俯き、

「ラル君。昨日の事は、誰にも言わないで。… 勿論ミラルドにも

…。」沈んだ声で そう言った。

「… うん、分かってる。誰にも言わないよ…」

しかし、困ったな。瑞希の側に ずっと居てあげたいけど、仕事が

あるし。そうだ！！

「ねえ、瑞希」

「何？」

「今日から しばらくの間 僕の家泊まりなよ！」

「えっ、… でも… 迷惑だから…」

「僕が瑞希の側に居たいんだ。お願い、一緒に診療所 行こう！」

「… 有り難う…」 瑞希は微笑んで、

「じゃあ、着替えとか 準備しなくちゃ」そう言って、嬉しそうに

駆け出した。

侵入者（後書き）

次回 ミラルドの友達 出ます。
居たんですね〜 友達！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8588y/>

ウルフ族の紋章～出逢い～

2011年12月6日14時53分発行